

95-66

木村正辭著

楳嶺八洲會

全

明治二十二年九月刊行

大八洲學會

291.64Ka 1924

播磨の濱づと

木村正解

こころ明治二十二年山陽道の汽車もかよひそめたりといへば、いか  
 で播磨の國の舊跡どもを尋ね見むとおもひしに、大八洲學會  
 の幹事魚住長胤ぬしは播磨の國人まで、こたび其國よものし  
 てうからはらからよもあひ、まさし其道すがらの會員の人だちを  
 も訪らひて、會のいよ、榮えゆかむことをはからむやといふ、そ  
 しいとよき折からなれば、日れもとも行べしとて、その出とつ日  
 をちぎりおきつ、

七月十二日 金曜 けふいかねて魚住ぬしとちぎるおきさる日なれ  
 ば、朝とくおき出て空のけしきを見る、此ごろの雨がちなる空のけ



337125

ふも猶ももりとれど雨はふらず、さらばさて午前四時すぐる頃坂本  
比家をたちて新橋の停車場にいたる、ゆとりなと伊藤圭介翁の古  
郷名古屋よゆとよあへり、かならふ友を得ていとうれし、かゝて汽車  
よのれば三條西侍従も西京よものせんとて來あひさるにいよ、心  
いさまし、七時二十分ばかりに八戸塚の驛よつきぬ、おとより藤澤ま  
での道のほど、此頃の霖雨よて軌道のそこねたる所あらずとて汽車  
をとどめたれば、おきて人力車を雇ひて藤澤にいたりふたたび汽車  
よのりぬ、大磯の濱邊をすどれば左よ伊豆の海を見見ととし、右ハ箱  
根あしがらの山々を遠と近とのかさなぞみえていとおもし、汽車  
ハ國府津よりやうくよはほりゆきて箱根山のはるかよ西北のか  
たをめぐりゆくと、松田の驛を出て窓よぞながむれば富士の山ハ左の

方よ見ゆ、いとあやしみつゝ行よ、御殿湯の驛近となるまよく、さら  
よ右の方にぞ見えたる、その軌道の屈曲せるを思ふべし、此よりはあさ  
りよさるる山もなとて、峯よぞ麓のかさまであらはれたてるさま、其けし  
きたとふるよものなく、けふハ朝より曇りたりしを今一はれそめたる  
よよりて、富士をみることを得るいと嬉し、此よて魚住ぬゝの詠る、

小山路をのほりてゆけハ富士の嶺はいよ、高くそ空よみえたる

山北よぞ小山よ至る間ハ隧道いと多とあり、乍ち穴よ入れば乍ち出、  
又入り又出づ、さながら夜と晝と行かふが如し、伊藤翁一絶を示す、

車上黒甜穂、不知幾隧門、夢醒忽驚視、一瞬富峯奔、

かゝて佐野を経て沼津よ下り行とほどよ、向ひよ薩埵山見ゆ、此山の  
左のかたはいとうちひらけたる海面なぞ、田子の浦とい此あたりをい

ふなるべし、静岡より西のかたは、架橋多かるが中も、殊ながきは  
阿部川大井川天龍川さて、遠江の濱名湖あり、むかしは、大井川  
の川越とて、輦臺といふもの、うちのり、又、人よ負はれて越へたる  
事、まてもし、ふがめふりて、水かさまされ、時、渡ることを得ず、故に  
前後の驛よとめられて、其水の浅び行をまちて、見たりとるなり、今  
は、さるわづらひもなとて、さはかりの川をまたととまは横ぎり行なり、  
世のうつりかはりゆとさま、あやきものよ、又、川のみまもあら  
ず、うつり山さやの中山などいふ、はさかしき峠まで、旅人のいとや  
みたると、ころなりと、きしを、今、いつのまよ、か、行すきつらんと、其山  
のありかたよ、あらで、過し、は、さ、い、へと、おぼつかなく、ほいなき、こ、ち、せ  
らるかし、舞坂の驛をすどれば、今、切の軌道よ、か、る、左のかたは、荒井

の海、渺々として、廣く、右のかたは、入江まで、はるか、向ふは、湖邊の村  
落を見さけ、軌道の前後、左右は、古りたる松並木まで、ところ、く、水  
まひた、た、る、さ、ま、さ、な、が、ら、水、中、よ、う、か、べ、る、が、如、し、其、佳、景、筆、紙、よ、つ  
と、一、が、た、し、東、海、道、の、軌、道、中、第、一、の、奇、觀、な、り、古、へ、の、濱、名、の、橋、は、此  
あたりよ、ありし、なるべし、か、と、て、こ、を、過、る、比、は、午、後、七、時、す、ぎ、あ、る、よ、  
け、ふ、ハ、陰、曆、の、十、五、夜、ま、て、月、ハ、海、中、よ、り、て、ま、の、ぼ、り、て、並、木、の、松、の、木  
かげ、よ、り、ほ、の、め、き、出、た、る、よ、や、う、く、ハ、海、の、面、も、あ、か、と、な、り、行、其、光  
りの水は、映じとる、は、お、も、し、ろ、し、な、ど、い、は、む、も、な、か、く、あ、り、た、が、汽、車  
の、す、ど、る、こ、の、の、を、や、き、を、か、あ、つ、の、こ、

今、きれの松の木間よ、かけみえて、浪路さや、か、は、月、さ、し、の、ほ、る  
午後十時、名古屋よ、着、き、氣、車、よ、り、お、ま、て、御、園、町、の、丸、屋、よ、宿、す、伊

藤翁よハハ、よてわかれをつぐ。

十三日 土曜

朝ごとく起出てみれば、けふも空ハともぞて小雨さへふりぬ、朝のほどは富士塚町なる大島爲足ぬしを訪ひ、かへるさ名古屋城を一覽す、天守の金の鯨尾ハ今も其まゝあり、城の裏手の西のかとの隅よ立る櫓ハもこの清洲城のなりといふ、それより宿よかへり直よ停車場よ行て汽車よのる、けふも三條西侍従と同車なり、岐阜大垣垂井等を経て關ヶ原よ出づ、關ヶ原と長岡との間ハ左右連山の外目にふるゝものハあらず、米原よ到れば俄よ夜の明けたる如くよて向ひよ廣き水面をみる、即ち琵琶湖ふて、こハ湖東鐵道の北の端よて、敦賀線ハこよよてわかれ行なり、汽車のすゝみ行よ志たがひ、湖水の面ハやゝあらはれ、彦根城の高と聳えたてるなど、實よ

風光絶佳といふべし、伊吹山ハ湖東山脉中の高岳よ一て右のかたよ聳え、庚申山もまた湖邊よ沿ひてたてり、かこて能登川ハ幡等の驛をすぐるよむかひで山ハ左よ見えやゝ湖水近となるまよく下流よ勢田の辛橋右よ遠と辛崎をのぞみ、北ハ比叡比良の山々うちかさなり、西ハ石山寺の山岳つらなれり、其景おもひやるべし、馬場よて汽車よ火をともし逢坂山即ち大谷の隧道よ入る、それより山科伏見等をへて京都よ着きたるハ午後四時なり、侍従ハこよておりたり、おのれハ猶汽車の内よありて大阪をよぎり神戸よいたる、此時午後六時五十分ばかりなり、山手通なる田所千秋ぬしを訪ひ、諏訪山の東常盤樓よゆきて宿す、いよし年小中村ぬしこよもよこあよやどりしこをとおもひ出て、何とハなけれどさすびよむかひ

しとおぼえたり、

何事をおもひ志のふとなけれともたゞそのかみのなつかしきかな  
夜よ入て田所ぬし來りぬ、主のおのれ司法省ありしある、同じ省  
まつごめをりしからま、殊になつかしきこころして、むかし今の事何  
とれと物がたゞ一して、夜ふとるまで酒のみかそつ、

十四日 日曜

けふも空はともれり、午前七時諏訪山をたちて、田所ぬ

一同道よて兵庫より汽車よのりて垂水の上月豊蔭ぬしを訪ふ、  
上月ぬしいとよるこびてやがて瀧の茶屋よめてゆきさまくもて  
なされたり、此家の海濱よ臨みて東の和田岬西の明石の湊にいた  
るまで海面うちひらけ、南西のかたの明石の瀬戸を隔て淡路島よ  
對ひ、南東の茅渚、海を隔て紀伊の苦ヶ島及び紀泉の連山に遙よ

對ひたる所なるをけふいなりく、小雨ふりてはれともり定めなけれ  
ばすべて遠き島山はみえず、

村雨のはれ行雲のたえまよ望みえかこれする淡路島山

魚住ぬしその古郷のかたをながめて

かへるへき我より先は村時雨あかしのせとを渡り行らん

午後四時上月田所兩氏に別れを告げて垂水の停車場よいたり、  
ふたゞび汽車よのる、志はしがほとよ明石よいたれりといへば、窓より  
望見るよ、舊城の趾の林樹鬱蒼の間よ疊壁櫓牆今猶聳え立り、此  
時午後五時過よて雨はいたと降出たり、こよておきて魚住ぬしの  
親族大明石村なる間島信雄方よいたりて宿す、

十五日 月曜

きのふより夜もすがら雨いたとふりて今朝猶やまず、

雨をよかして大明石村を出立ち汽車よのりてゆくとちまちよ一の川流をみるこれ明石川ふりこの西のかた明石町よつきたる處を王子村といふ上古弘計億計の二皇子父尊の難を避けて潜み居給ひし此處より二里半ばかり北のかた忍部といふ處まで其處を立給ひて此王子村よいたり青鞞よ召せられて京よ歸り給ひしなりとぞ今柿村の北のかたの林中よ王子權現の社あるハ其趾なりといふ汽車より遙拜してすぐ十時頃姫路よ看一坊主町の春山第彦ぬ一を訪ふ息男春山生樹ぬ一ハ物學びよ東京よきたりを望しを夏季の休暇までこたび同行してきのふ兵庫より直よかへりたればけふおのがごちの行を待居たり中食の設けとこのへねむごろよもてなされぬかゝて姫路城の天守を一覽せむとおもひて

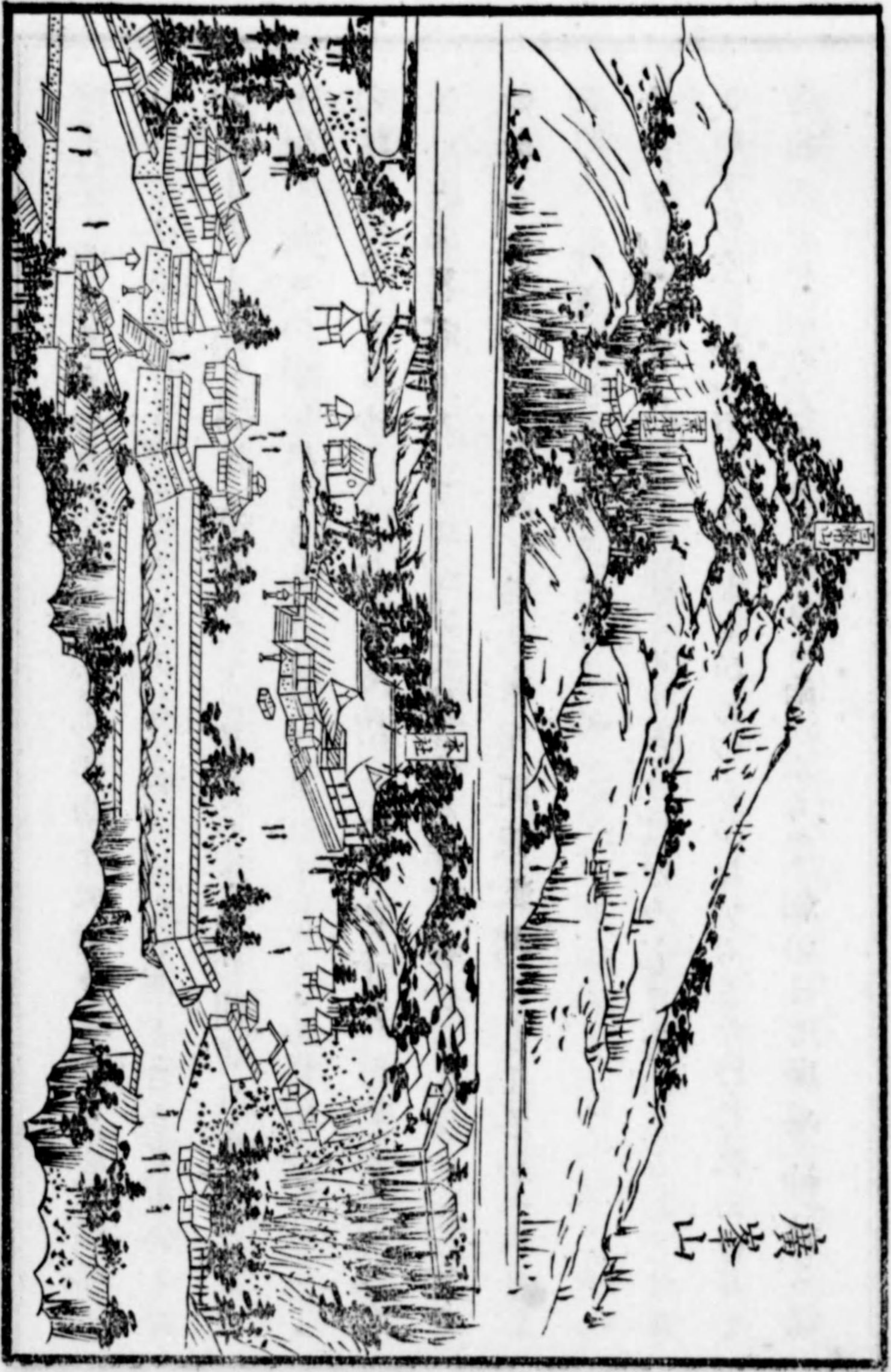
いかでよきたつきもがなと第彦ぬしよのかたり出たるよ會員弘田親厚ぬ一ハ其かたの人なれば申一試みるべしとて使はしらせたるよいとととうけひきてやがて其事とこのへをといふいさうれし今ハ雨もやみたれいさとて長胤ぬし生樹ぬ一をつれたちてかもしこよいたれば案内して天守よつれいたりぬこハ豊公の中興せるものよて瓦ハ桐の紋をつけたるもの今猶多と存せり裏手のかた石垣よ石白の片とれ一箇を狭めり天守築造のを或賤姫の寄進志たるものよて豊公其志を憶じこよ置きたるなりとぞ俗これを姫の涙石と唱ふこれより内よ入る階梯をのぼるおと八階よして上層よ達す窓より望見るよ南のかたハ蒼海よ接し家島坊勢島丹鹿島鞍掛島の諸島水中ようかべるが如く北ハ増位廣峰書寫の諸山相

連り、東より市川の流を帯びて、其眺望いと奇觀なり、こゝを下りて營所中の諸室及び俱樂部等を一覽して辭し去る、かゝて魚住ぬしの郷里廣峰山よのぼらんとして車雇ひて出たつ、姫路より北のかた十六丁あまりよとしてその麓はいたりぬ、おゝの村を白國といふ、梅の名所よて廣峰の山よそひて、幾千株の梅樹あり、花の頃ハ探梅の遊客多しといふ、こゝより廣峯山よハのぼること十四五丁なり、道はいと直立して且石山なれば、老の身よてはいと堪がたきを強てのぼる、山の中腹より見れば廣とうちはるけたる田園曠野の中よ。所々よむらがる村落のさまよた目下よ姫路城を臨み海面よハかの家島鞍掛島等を見、左の方よ市川の長流あり、はじめ市川ハ近傍の山々のわけよかゝれてこゝざりとも、やゝ山よのぼるよ隨ひい

とよぼろるとみえわたり、その近傍の小山また村々の家居などハやうくよ小さとみえゆとなど、そのながめのうつりゆとさまえもいそずおもしろし、山よハ小松生志げり萩薄など岩の間より生出たるいとをかし、足のつかれもち目すれて志ばしたゝすみなかめをり、やゝのぼりはてよまよ少しとだりたる所よ人家四十戸ばかりもあり、魚住ぬしの舊宅もあゝよてやがて其兄魚住宜長かよ宿す、夜谷口政堅内海重章芝和忠の諸氏來て、閑談數刻よして各かへれり、おのれもふすま引かゝぶりうちふしぬ

十六日 火曜 夜中ばかり寐ざめてきけばいみじう雨のふるおとするよ、あすの空いかゝあらんとおもひわづらひながらまたねぬ夜あけておき出てみれば、空ハともりさるも雨ハふらす、朝のほど廣峰神社よ詣





づ、此神社ハもと牛頭天王と稱し、祭神ハ素盞烏尊よりて今を距  
 ること一千二百年前天平年間吉備大臣勅許を得て造立志とる  
 ものよて今の社即當時のものなりとそげよいと古びたる宮居よて、  
 柱また扉などハ虫ばみたるどころ朽たるどころいと多し、其うちいと  
 奇なるハ、間毎の柱と柱との間廣狭同じからず、何の故あるを知ら  
 ず、又本社の殿の後面ハ九部の神穴とて九の穴あり、其上ハ支干  
 の繪をかけり、これまたいかなるよしハ詳ならず、參詣の人々これ  
 を拜し、其穴より賽錢を投ず、京都の祇園の社ハこゝより遷したる  
 なりといふ、かえてけふハ書寫山ハものすべしとおもへど、きのふ此山  
 みのぼりたるだよいとたへがたかりしを、書寫山ハこゝよりハはるか  
 高き山なるときけば、いかよしてのぼらばやとおもひもづらひたるよ、

魚住ぬしとかとて山竹輿ヤマタケウひとつを求め出て、これよのりてのぼらんよやすかるべしといふ、いとうれしとてさらばとて出たつ、竹輿ハ麓の里平野村といふ所もありといへば麓まで降るよきのふ來し道さいたがひて、樹木生えけりたるあはひを谷水のかなたこなたさななぐれ出たるさまいともものすごとし、道はきのふよ里もさかしけれども降なれば志ばしうがほどよ平野村よ至れり、此村の民屋のうしろの崖よ古き岩穴ありとさきししかば輿丁よ案内せさせて行こるよ、窟ハ高さ七八尺ばかり深さハ五六間ばかりもやあらん、その奥よ腰輿の形よ刻ふしたる岩を安置す、これを輿岩ウケイといふ、當昔ツマカミ廣峰の神体を乗せきたれるものなりといひ傳ふ、之よりかの山竹輿ようちのる輿ハ竹を打まげて造れるものなるが、いと古びてこゝかしこやれたるを繩も

て結びかためたれば、そのさまいと見どるし、魚住よりケツト二つをかりきて其古びとるところをまどひかとしたり、さて輿丁ハいかゝあらんこ心よおぼつかなくおもひたりしに、おもひしよハまさりていと上手なり、横關川ヨコセキガハ飾西郡廣峰を距る一里イチリといふよいたる、此川常ハ水いと浅きをよべの雨よて水かさまされりといふ、輿丁ハおのれをのせたるまよて見たる、さかまさおつる水に足なふみはづそ、深きところよなはまりそ、輿の内よりいさめつゝわたる、いとあやうし、やがてかなたのきしよのぼりそれより書寫山の麓にて志ばしやすらひ、ふたゝび竹輿よのる、たゞにてだよのぼることのかたからんとおぼゆるよ、輿丁ハもれともせず、あるハ木の根あるハ岩かどよ足ふみかけ、かふたこなたとつづらをりの道十八丁をよちのぼるハ、いといさまし、竹



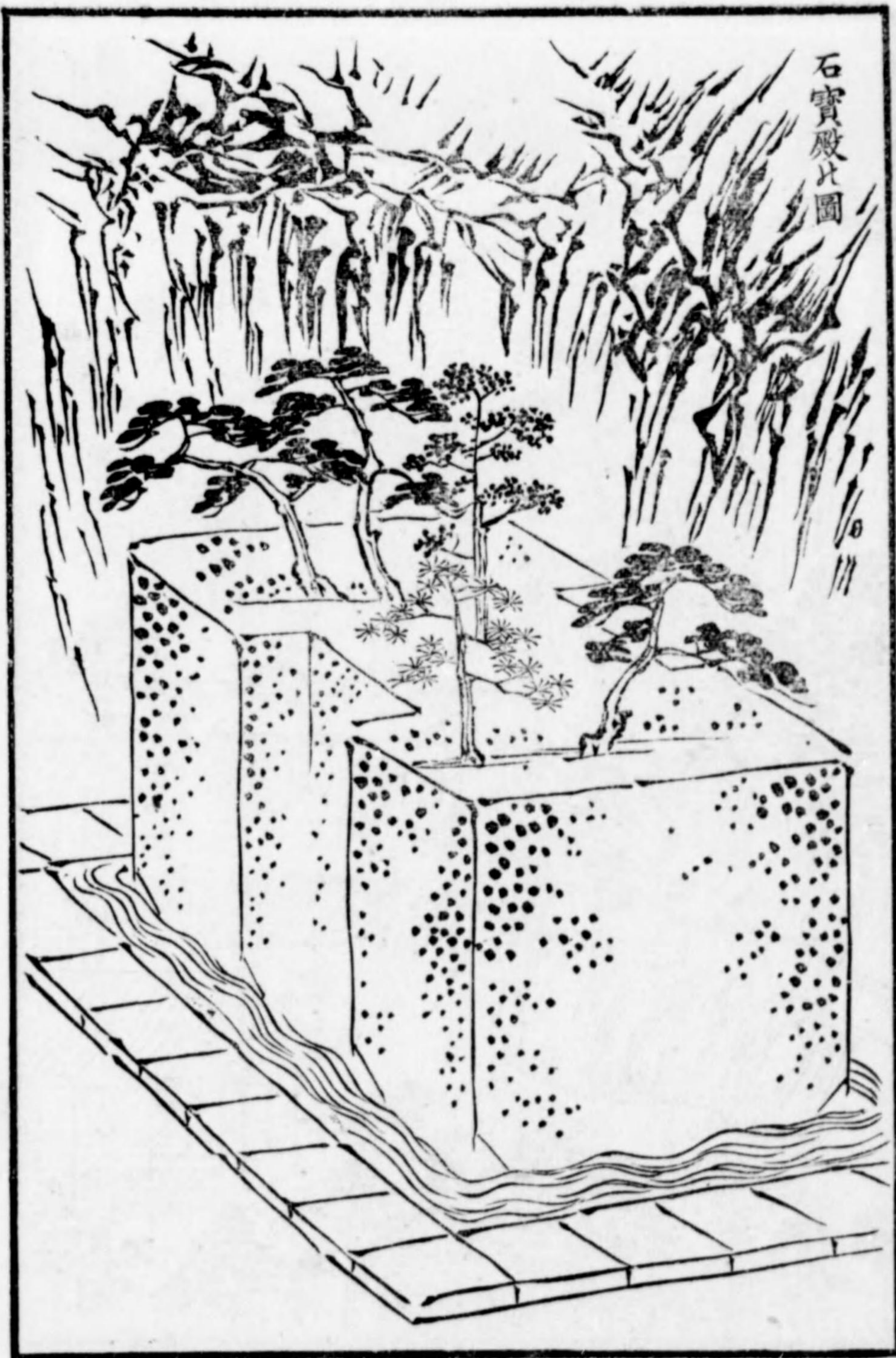
書寫山  
圖教寺

興より下の方を見おろせば、目とるめききも魂もほとく消ぬべとおぼゆのぼりはつればや、平坦ふり、堂のめぐりハ古りたる杉いと多と静閑幽邃の地より、前に休憩所一屋あるのみ、當山ハ永延年中性空上人の開基よて、今を距る九百年のむかしながら諸堂今は依然として存せり、堂の彫刻物ハいつれも尋常の物よあらず、殊は車寄の破風の下なる雌雄の鳳凰ハ、今一飛び出さんするさまささるハ、いかなるエのわざよあらん、その下ハ龍左右の柱ハ象の形を彫りたり、いつれも美事也、堂をおりて右のかたよ二丁はかりゆけば三つの堂あり、また一丁あまり行ば奥、院性空上人の御影堂なり、皆當時の建物よていと古びて見えたり、かゝて山を下り麓の泉水亭よて中食し、例の竹興よのりて姫路の旅店袋屋よつきたるハ午

後四時ばかりよなん、會員春山弟彦弘田親厚兒島八尋の諸君訪  
ひ來つ、此人々々のおのれははじめて逢さるものから會員なりごしも  
おもへばいとゆかしと親しきことちして、心へたてぬよもやまの物がた  
りよおぼえず時をうつし、おのくかへりしハ十時ばかりよもあらん、  
やがておのれもうちふしぬ、

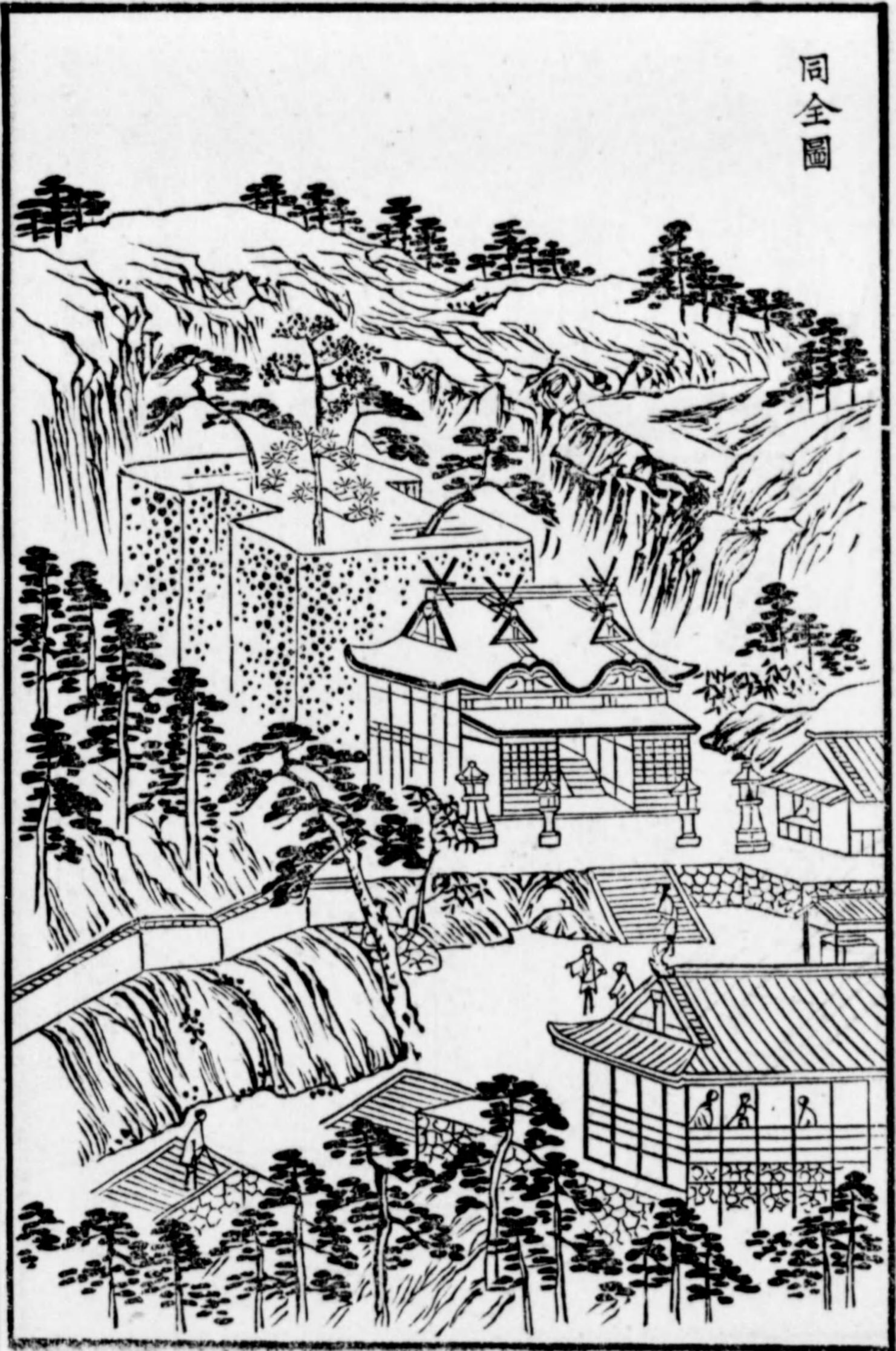
十七日 水曜

けふも播磨の名所舊跡を尋みむとて、朝ごとく起出て  
空のけしきをみればはれわたりたるよ、いでやとて車雇ひて姫路の  
やどりを立出て、まづ曾根まいたる、社前の松いと古びたる木の枝  
葉まげりあひて、横まひろごりたるさま二十間四方ばかりもやあら  
ん、幹いとふとと三かゝひあまりふるべし、古へのハ管公の手づから  
植給ひしものふりしを、寛政の頃枯もて、その古木のもとも自然よ



石寶殿此圖

同全圖

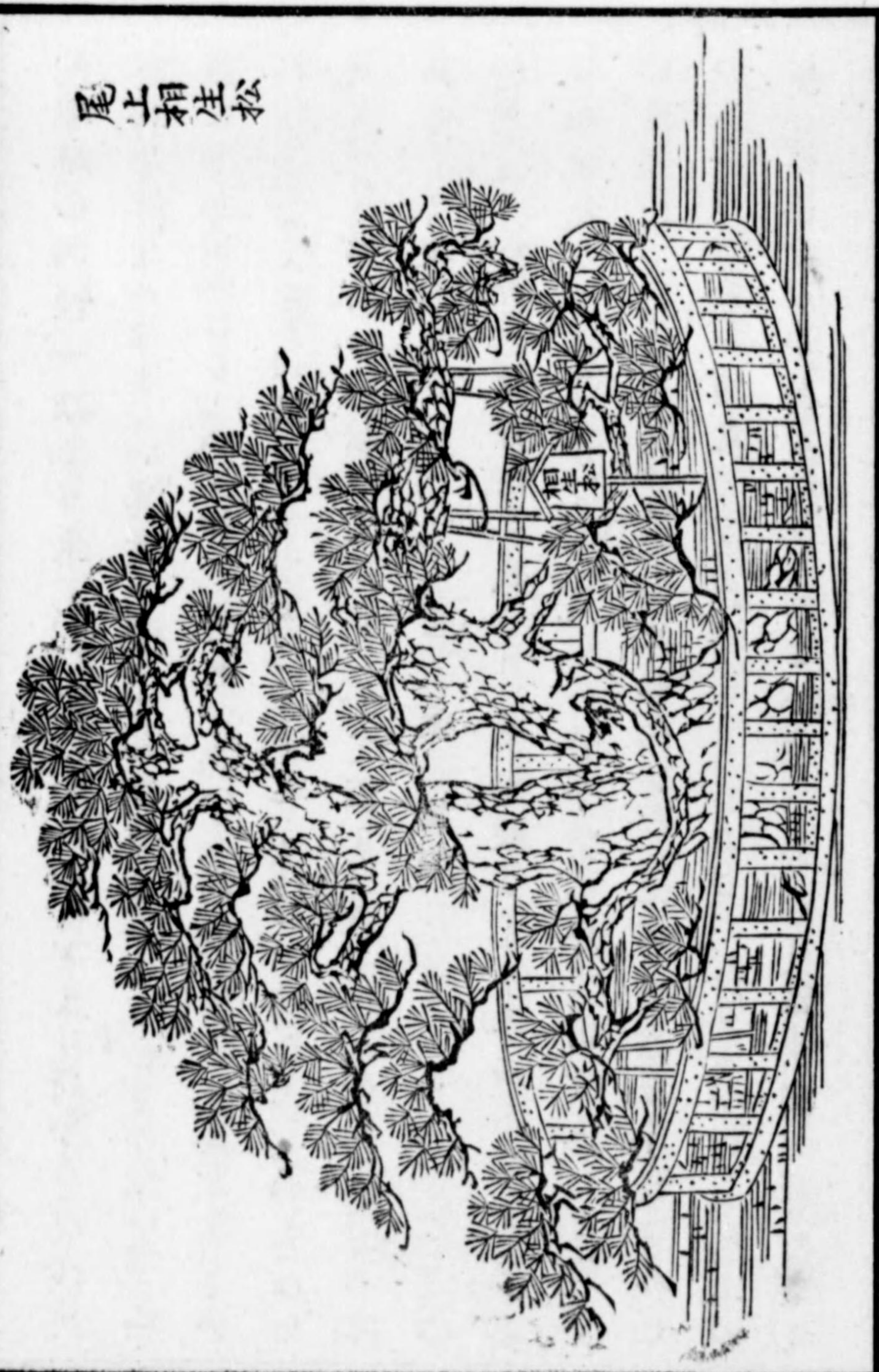


生出たる木の再びかといなりしなりとぞ、もこの枯木も今猶社前  
ありて、屋を覆ひ、めぐりま埒を結ひて雨露を防ぎ、人の手ふれむこと  
を禁じたる、こゝを出て石賢殿まゆと、曾根村より東北のかた一里  
ばかりまあり、其處を生石村イホイシといひ、石殿を神体として生石神社  
といふ、石殿ハ山の中腹に巖窟の内まあり、山腹の三方を切り、其  
下のかたハ四方溝かさちま掘穿ちたれば常ま水をたへり、故ま土  
俗この石殿ハ水上ま浮びあるものといふ、方三間半高さ二丈六尺  
ありとぞ、頂まハ松むろの木其他の雜木生立り、前面ハ平らまして  
左右の中央ハとぼと溝のこことま切なり、後のかたま屋根やうの  
形を造れり、たゞしいまだ造りをへざるものとみゆ、彫刻のなりたる  
後にはうしろより前のかたま起し建べともものしたるもの、如く、當

國の風土記に池之原の南に作石あり形如屋、といへるものこれならんか、猶考ふべし、

こより一里半ばかりゆきて高砂にいたる、松は曾根の松と同じき形ながら、此所なるハ雌雄の松を一つは植生したるなり、此所はむかしの高砂城ありし所にて、市街の戸數ハ千七百もありといふ、いと繁昌の地とみえたり、今の高砂神社ハ元和年中本田忠政の造營せるなりとぞ、高砂を出て十丁ばかりゆくと鬱蒼たる松林あり、こゝに入れば直に尾上に出づ、古歌に高砂の尾上の松とよめるハ此社前の松林をいへるなるべし、古木の松生ひまげりて千態万狀恰も舞子、濱に類し、其廣きおとハ四方四五丁ばかりもやあらん、いと奇觀なり、此地四季とも松露を産すといふ、相生の松ハ社内にあ

尾上相生松



り、雌雄の兩種一根より生じ、一丈ばかりのほどより兩幹となれり、其幹の雄とみゆるもの其葉ハ雌也、其幹雌とみゆるかとの葉ハ雄也、互に性をかへたるもの、如し、奇といふべし、高砂なるハ其根よりじかれたるを、こなるハ根ハひとつとして中途よりわかれたるがをかしきなり、また曾根高砂の松ハ丈ひきとして横よりひろされるを、こなるハ丈高として枝ぶり雅なり、たゞし此ハ後ハ植繼たるものよて、いましへのハ枯れて其幹を社務所ハ藏せり、質堅硬よして化石の如し、按ふる高砂なるも、こなるも、こハかの古今集の序ハ附會したる好事の者のわざよ出たるなるべし、此松のかたへに都總しき片枝の松といふもあり、其枝葉東の方よのみさしひろごりたるもをかし、尾上の鐘ハ社前なる小屋よありていとひきとつりあり、盤涉調の響ありと

いへばうちこゝろみる 尾上之鐘

よげよ其響ほがらか  
よしていとよ、鐘の  
高さ三尺二寸厚さ  
一寸九分徑り二尺  
五寸といふ、めどりよ  
天女の形花紋等あ



り、社傳よハ神功皇后三韓より持歸り給ひしなりといへり、そハこまれかとまれ千四五百年上の物なることハ疑ひなし、尾上より北のかた十丁あまりよして北在家村といふ處よ刀田山鶴林寺といふ佛刹あり、加古川驛より廿四五丁ばかりなり、聖徳太子の創立

よして<sup>太子</sup>本堂ハ三間四面よて釋迦三尊四天王の像を安置す、内陣の四柱にハ八大金剛童子を圖し、四壁ハ三千佛の像を畫げりといへど、今ハ剝落して見えず、東の方ハ太子の宮殿あり、内ハ四天王の像を圖す、右の厨子ハ太子の像を安すといふ、此像ハ太子の頭髪を植たるをもて、植髪の太子と稱すことぞ、むかしハ坊舎いと多とありて、いと盛なる精舎なりしよしなり、今存するものハ本堂太子堂鐘樓三層塔のみ、三層塔ハ下の一層のみ彩色を施し、上の二層ハ彩色なし、未落成といたらずして止めたるもの、如し、此塔の坤北方の屋蓋ハ三面ハ鬼瓦ありて、鳥佛師の作なりといふ、鐘樓の鐘ハ尾上の鐘とひとしと、龍頭の傍ハ竹管の形ありて、天女花紋等の模様もその大きもや、同じといふ、余觀ず、また浪花<sup>ナニハ</sup>長柄の霍滿寺

よもこれと同種の古鐘ありといふ、此精舎ハ創立より千七百年ばかりの間、回祿の災なく存るものなりことぞ、げよさるべと見えたり、本堂の前の扉ハ朽はてたるよや一も存するものなく、かゝて加古川驛よゆき、午前十一時四十分の汽車よて明石よいたり車をおりて人丸神社よ詣づ、舊城趾につゞける東のかた丘のうへハあり、こゝより見おろせば須磨明石の浦々一目よして、景色絶佳なり

岡の上ゆうちなかむれば須磨の浦明石の門みゆ淡路島こゆこハ此處のあるがまゝをたゞことよ口すさびたるよて、歌のやうよもあらねど、筆のついでよかきことめつよりといふ意のゆといふ辭ハ萬葉集の頃までハいと多と用ぬたりしを、古今集よりこふたの歌ハをさく見えず、されど詞ハ廣きがよければ、今も用ぬたらんよハ使りよ



きこともあるべきをや、社前より盲杖櫻筆柿などいへる木あれど、いづれも俗傳としてとるよならず、神体ハ頓阿の作にて丈七寸ありといふ、こゝかのほのくこの歌よつきてこゝに勸請志たるものなるべし、されどほのくこの歌ハ舊本今昔物語を見れば、小野篁此歌にて人麿朝臣の歌ハあらず、またもとの別當月照寺の庭前より赤穂義士間瀬氏の裁たる古木の八房の梅あり。寺の寶物を一覽するよさせるものハなし、此を下りてふたたび明石よかへりて、汽車にのり神戸より着たるハ午後一時十分なり、魚住ぬゝを待合せたるに、かねての約束よりハおとれて午後三時四十分よきされり、やがて同行して神戸の田所ぬゝのもよいたる、洋食の設けなどしてねんころよ饗應せられたり、此たびの旅行にて洋食ハはじめてなれば、いとめづ

らし、さて十時頃誦訪山の東常盤よいさり宿す、

十八日 木曜 けふも空ハやゝはれたり、午前七時五十分誦訪山を

出て神戸より汽車よのり、十一時大阪よ着し、座摩宮ふる渡邊資政ぬゝを訪ふ、まゝ備後町なる博聞社の支店よいたり、大八洲學會出版の書籍賣捌の事を托し、中の島渡邊橋際の花屋よ宿す、中食後舊城またハ天満中島等を遊覽す、午後會員の井上景明彈琴緒瀬川正夫の諸氏來る、

十九日 金曜 空ともりをりく、小雨ふる、午前七時大坂を出て九時

すぐる比西京よ着し、木屋町の大可樓よ宿す、加茂川の流よ臨みて樓ハ三層よして風景よし、

廿日 土曜 それともり定めなし、午前七時大可樓を出て下加茂よ

詣づ夫より神樂岡の吉田神社を拜し、南禪寺より疏水工事を一覽す、此水源ハ近江の大江より始まり、三井寺の麓より逢坂山より隧道を穿ち、蹴上をへて、こゝに至れるなり、さて佛殿の右の山手なる龜山上皇の御靈屋の脇より御門前より高さ二丈餘もあらんとみゆる練瓦の棧橋を設けて、其上より水道を構へ、南禪寺の方丈のうしろの山の中腹より永觀堂のうしろの山よりいたれり、その御靈屋のうしろの山をめぐりて蹴あけよ出て見れば、日岡山より六百餘間の隧道を疏通して、これより閘門を設けたり、南禪寺の裏なる線路ハ去年築造のなり崩壊せしよしをきゝしが、今も其まゝあり、但しこたびハその裏山を開鑿して線路を附かへるふらんといふ、僅し此あたりのさまをみるに、其工事の艱難なりし事おもひやらる、こゝよ

りかへるさま青蓮院の御殿を拜し、智恩院をめぐりて八坂の社よいたり、鳥居亮信のをたづねたるよ、ぬしよもいとよるこびてやがて社前なる茶亭榎尾よぬて行て、さまくもてなごきめられたるよ時をうつしたり、さて午後二時はかりがほどに辭し、わかれて圓山の吉水園の温泉場よいさり志ばしやすらひ、それより高臺寺よいたり豊公の北の政所の御靈屋よ昇りて、豊公及び政所の像を拜す、中央より高臺院殿の念持佛千体の地藏を安置せり、此堂の天井ハ豊公征韓のをりの御鑑の家形の天井を其まゝ用ゐたるなりとぞ、これよりまさ山よのぼれば、政所の塔長嘯の塔あり、まさ千利休の好なりといふ傘亭も今猶存せり、此ところハいよ一年見のこしなりしがあかねば、さらよこたび訪らひたるなり、かゝて清水寺よ詣て、松

原通りより新京極をへて木屋町の旅亭よかへりぬ、夜岸本業壽榊原長敏の兩氏來る、けふハ晝すぐる頃より空少くはれそめ、長雨のはれ間あるから四條の涼いごまきは、志として川上川下の旅亭にてはいづれも流れよのぞみたる露臺よごもし火かゞげ、三條橋より四條橋までの間ハ川の中よつらねたるいとよろづのごもし火てりかゞやきとなりて、此日ごろふりつゞける雨よおほくしかりしも、今宵よそかにどりかへしつるごちしつ、かの二人のぬしだちごもよ夜ふとるまで吞かはして、やがてうちふしぬ、

廿一日 日曜 夜もすがら雨いとふり、けさ猶止まず、終日宿よごもりなり、

廿二日 月曜 をりくく小雨ふる、午前七時西京を出て汽車よのる、山

科をへて大谷の隧道を出れば、たちまち向ふる蜈蚣山を見、湖水を見おろしとるけしきハ、一しほのながめまで、いと日、東よりきさとりをりみしごハこよなうまさりておぼゆ、かててけふハ養老よ行むごおもひおきてなれば、關ヶ原より下りて人力車を雇ひて、停車場より南よむかひてゆゑ、此の關ヶ原停車場ハ廣き原野のたゞ中よしてこれそのかミ大阪と關東がたごの古戦場の趾なり、車夫どもよごへばかの山ハ松尾山の城趾なり、此方ハ大谷刑部の陣どり一所なり、かしこハ島津の敗北道とて大坂よ走り還りたる所なりなどいふさばかり盛なりし豊公の跡も、此一戦よ破れてはかなとなりはてよし事をおもひ出せば、此頃の雨よとちたる袖ハいとぬれまされり、こより牧田村を経て牧田川の堤よ出づれば、右のかたハ高き山々つら

なり立ち、左ハ川いさよほ志ろとみえりたりなる、其けしきいさよし、さて養老よつきたるハ午后一時ばかりなり、關ヶ原より三里ばかりよして高田といふ所あり、又三十丁ばかり行ば白石といふ村なり、白石より山道十丁餘のぼれば養老山の中腹なり、豆馬亭村上雄三といふ旅店に着と、此樓上より見りたせばいさ廣とうちはれて目よさへぎるものなとて美濃の國內ハさらなり、東南ハ尾張三河の山嶽を望み、また南西ハ伊勢の連峯を遙に見さくるなど、實ハ佳景なり、ひるの飯をそりてやがて瀧見むとて山よちのぼる、此家のむかひの少し高き所ハ千歳樓といふあり、前面ハ古木の櫻多し、春のながめおもひやらる、こゝをすぎて少下りてまたのぼれば養老神社あり、そこハ菊水とよべる冷泉涌出づ、山中冷水多しといへども其ひや

ゝかなること、これを第一とす、名物の養老酒ハもと此水よて醸造さたるなりとぞ、

いさよらはまつ立よりて汲とらん老も若ゆときとのまじ水

このかたへに人造の温泉場あり、こゝよりやゝのぼれば瀧ハ響近ときこゆ、瀧ハ前面の巖よかてれて遠とのぞむハみえす、此巖ハさし出たるあなたにめぐりいたれば、ごみ瀧のあらはれ見えて、そのまかなるに一層の壯觀をそふるなり、左右より生ひまげれるかへでの木ハ間よ見えすけるふと、其けしきたとふるよものなし、

染つとす秋の錦やいかならん瀧の白糸見てもあかねを

かとてまた少しのぼれば瀧壺のともいたる、その入口ハ二つハ自らなる巖左右よたちて、恰も家ハ門よ入るが如し、こゝをいれば瀧

壺のもととなり、瀧ハ高さ九丈幅九尺ありといふ、壺の中央ハ巖にお  
ちかきふりたるうへみ、自がら樹木生えけりて島山此かたちをなせり、  
いと奇観なり、志ばしたすむほどは瀧の志ぶきまで袖も志どよめ  
れそぼちて惣身ひやくかよなりたるも、雨さへふり出たれば、もこの道  
をとだりぬ、

瀧つせにひちたる袖をかへるきの雨もいたとぬらしつるかな

此瀧ハそのむかし元正天皇の御時はじめて世ハ發見<sup>アヲハレ</sup>て、かくこ  
も天皇のかゝる荒山中ハ二とびまで行幸遊ばし、此瀧のあらはれた  
るを祥瑞として、年号をさへ養老とぞ改め給へりし、その時の行宮  
の趾ハ麓なる白石村ありて、行宮神社と奉祀せり、

廿三日 火曜 朝雨いたとふる、けふハ波早<sup>ハ</sup>行て長良川の鵜飼を見

養老瀧



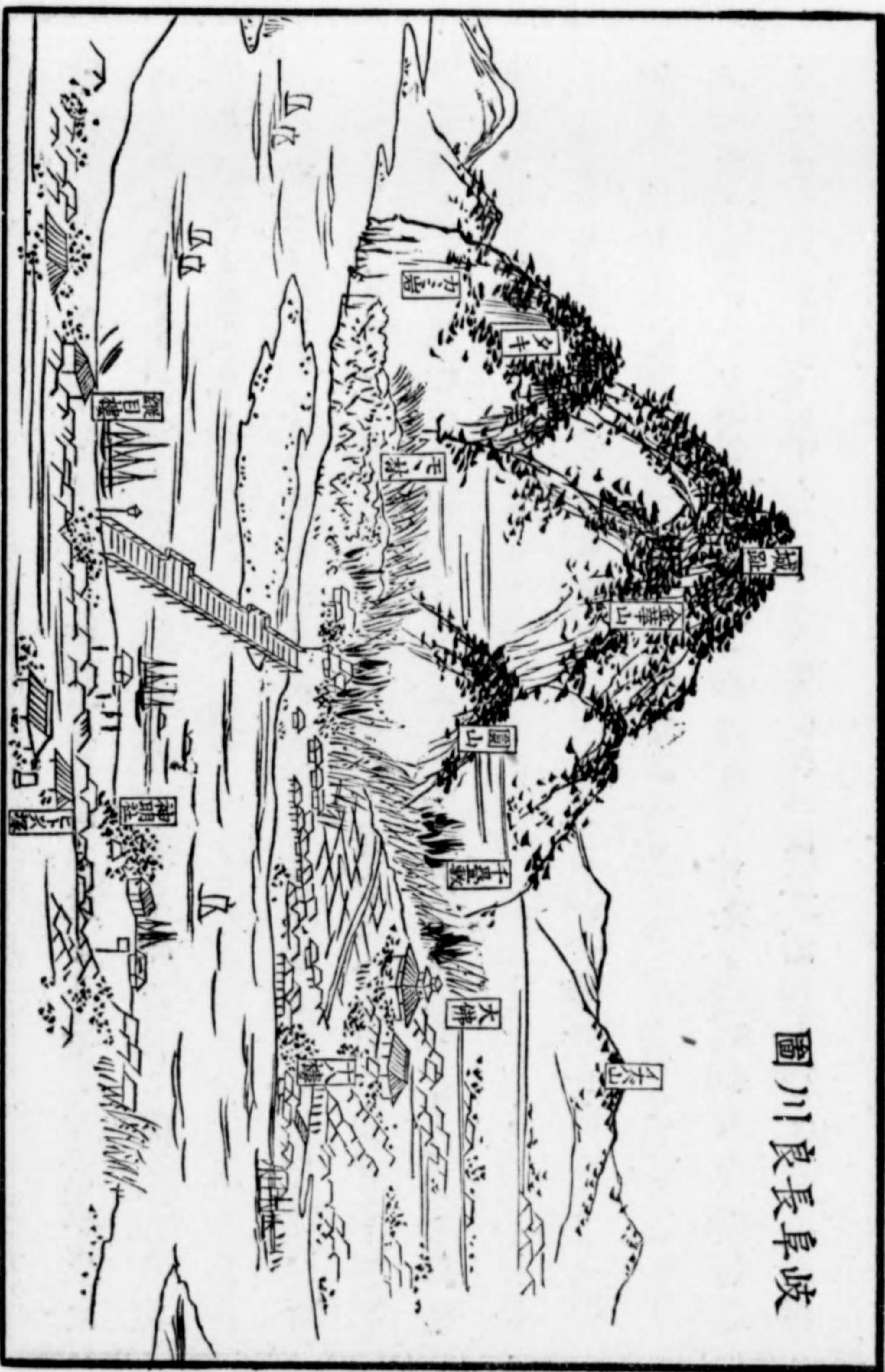
はやとて、午前七時雨を、かして養老を出たつ、此頃の霖雨まで出  
水も、所々往來の道をひたせれば、水中を車まで見たる、いとあやう  
し、午前十時頃まいたりて雨は止たるも空は猶曇れり、大垣より汽  
車ののりて十一時過る岐阜まつきぬ、今小町の津の國屋まいこふ、  
此まで聞くとは此ほどより川水まさり且まよりまたれば、鵜飼はな  
りき、今宵もなからんといふ、いとほいなし、せめては長良川のけしき  
をだま見ばやとて出ゆと、此より十丁あまりもあるべし、行いたりてみ  
るまげも水かさまさりて其漲りなぐるゝ音のすさまじとおそろしけ  
なり、川いと廣くその流れいとほまろくみえ、こなたの川岸は高と  
聳えとてる峯は稻葉山まで、古への城趾は此山上もあるなるべし、俚  
俗はこれを金華山と呼び、西南のかたなる峰を稻葉山といへど、稻

葉山の惣名よして金華山の俗稱なり、山の麓より峯まで樹木生え  
げり、東北のかたはたは長良川よのぞみ、巖石巖々たる斷崖なり、其  
佳景いふばかりなし、

おもかけはうかひて見えつ長良川まさる水かさよさゝぬ鵜舟も  
なからへはまたもきてみんなから川鵜舟きほへる夜はのけしきハ  
晝のけしきハ見つれど、夜のけしきを見ざるが口をいさにかとなん、  
また魚住ぬし

長良川まさる水かさよ瀬をはやみ名よおふ鵜舟かけもとめす  
長良川よりのかへるさ三浦千春ぬしをこひとるよ、なきほどふりし  
かばその事いひおきて、かの津の國屋まで中食し、鵜飼なからんよハ  
こゝよ用なしとて、直よ停車場まいたれば三浦ぬしハこゝよ追ひき

圖川良長阜岐



たれり、ひとつふたつものなどいふうちよ、汽車ハ出べしといふ、やがて  
目かれを告て車よのればたちまち熱田よいとりぬ、皇太神宮を拜し  
て、海岸通の岡田屋に宿す、

廿四日 水曜 雨少しふる午前五時熱田を出て汽車よのる、車の窓  
よりみるよ、蒲郡カマコホリの驛の海面よハ、をかしき島々ありていとよきふか  
めなるをききりをりよハ心もつかで過よしなり、小夜の中山の隧道を  
出れば眼の下よ大井川の流をみる、汽車の架橋よかゝるをりしも  
雨はれて川上の山々の青みきたりてみえたるもいとおもし、此  
あたりのけしきハ東のかたより來し時よみよりハかへるさのなが  
め一志ほまさりておぼゆ、堀内島田の間ハ左右よたてる松の並木の  
けしきまたなとめでたし、けふハ雨ふりて御殿場よての富士ハ見え

す、大磯の驛まで高崎正風ぬゝあひて同車し、何とれごものかた  
らひつゝ、いつしか新橋の停車場はつきぬ、夫よりたゞ坂本村の  
家にかへりぬ、此時午後八時五十分ばかりなり、

一日のうちよ百里ばかりの道をゆき、せむことハ翹なとてハ  
かてかな志うべき、今朝熱田を出て今し東京の家よかへれる  
は、瀛車といふものゝあればよこそ、かゝることを考へ出でたる人  
のいさをこそいみじともいみじとハいふべけれ、おのれをトめ東  
京をたちて、其日名古屋よいたりて宿したるよ、たちまち人の  
ことどひのかそりたるよおどろきて、今ハ百里ばかりの遠き所よ  
來よけるよとおもひも、をかしかりき、

左の地名の考へハ、姫路よやどりたるをり、兒島氏のかきて見せ

たるふるを、こゝよ附記す

播磨風土記飾磨郡大野里之考

兒島 八尋

播磨風土記飾磨郡ノ條ニ大野里砥土中、右稱大野者本爲  
荒野故號大野、島宮御宇天皇之御世、村上足島等、上祖惠多  
志貴請此野而居之、乃爲里名、所以稱砥堀者、品太天皇之世、  
神前郡與飾磨郡之堺造大川岸道、是時砥堀出、故號砥堀、于  
今猶在トアル、大野里ハ今ノ野里ノ町々及ビ野里村ノ地  
是也、但平野村ノ西ニ大野ト云村アレバ一ワタリハ此村ノ  
事ト思ハルレ、砥堀トハ隔タリテ其間ニ平野村白國村  
アレバ、今大野ト云村ノ事ニハ非ザル也、依テ按フニ野里  
村及ビ野里ノ町々但シ今俗ニ野里八丁又ハ只ニ八町云、八丁ト云  
ハ野里ノ通り筋ノ道程ナリ八町ト云ニ據ルハ



鍵町鍛冶町河間野里寺町大野町威徳寺町米屋町福本町河  
町半分計ヲ除ク野里寺町大野町威徳寺町米屋町福本町河  
 間町半分許五郎右衛門屋敷東中島西中島村横手村砥堀下  
 村マテナ云ヒシ名ニテ、即其地形大キナル野原ナリシ故  
 ニ此名起リシ也、就中野里ノ町ノ中ニ大野町ト云ハ古名  
 ナ存シタル也ケリ、又次ニ小川里條ニ一云小川自大野流  
 來此處故曰小川トアレバ、大野ト云ハ今ノ野里村ノ地ナ  
 ル事大河ノ沿岸ナルヲ以テ知ラル、也、サレバ古代ニハ  
 大野ノ里ト云ヒシヲ大ノ字ヲ省キテ野里ト云地名トナ  
 リシナラン、サテ砥堀村ハ神東郡ニ属ケリ、又大野村ハ平  
 野村ヨリ西隣ノ地ナレ、尾廣峯山ノ西南ノ麓ニテ山ト山  
 トノ間ニ位シ、大河筋トハ懸隔リタレバ、小川里條ニ自大

野流來此處トアルニ相當ラス元來其地大野ト云名ニモ  
 似ズ狹隘ナレバ平野里ノ内ナル可シ、猶イハハ本書此所  
 ノ体裁收野里新羅訓村大野里砥堀小川里云々ト、平野ヨリ次  
 々東方ニ趣ク順序ニテ、大野里砥堀云々トアレバ、砥堀ト地  
 續キナルヲ明ラカナレバ也、

附云右ニ云野里ノ内鍵町鍛冶町河間町コハヤ河間町半分ハ總社氏子

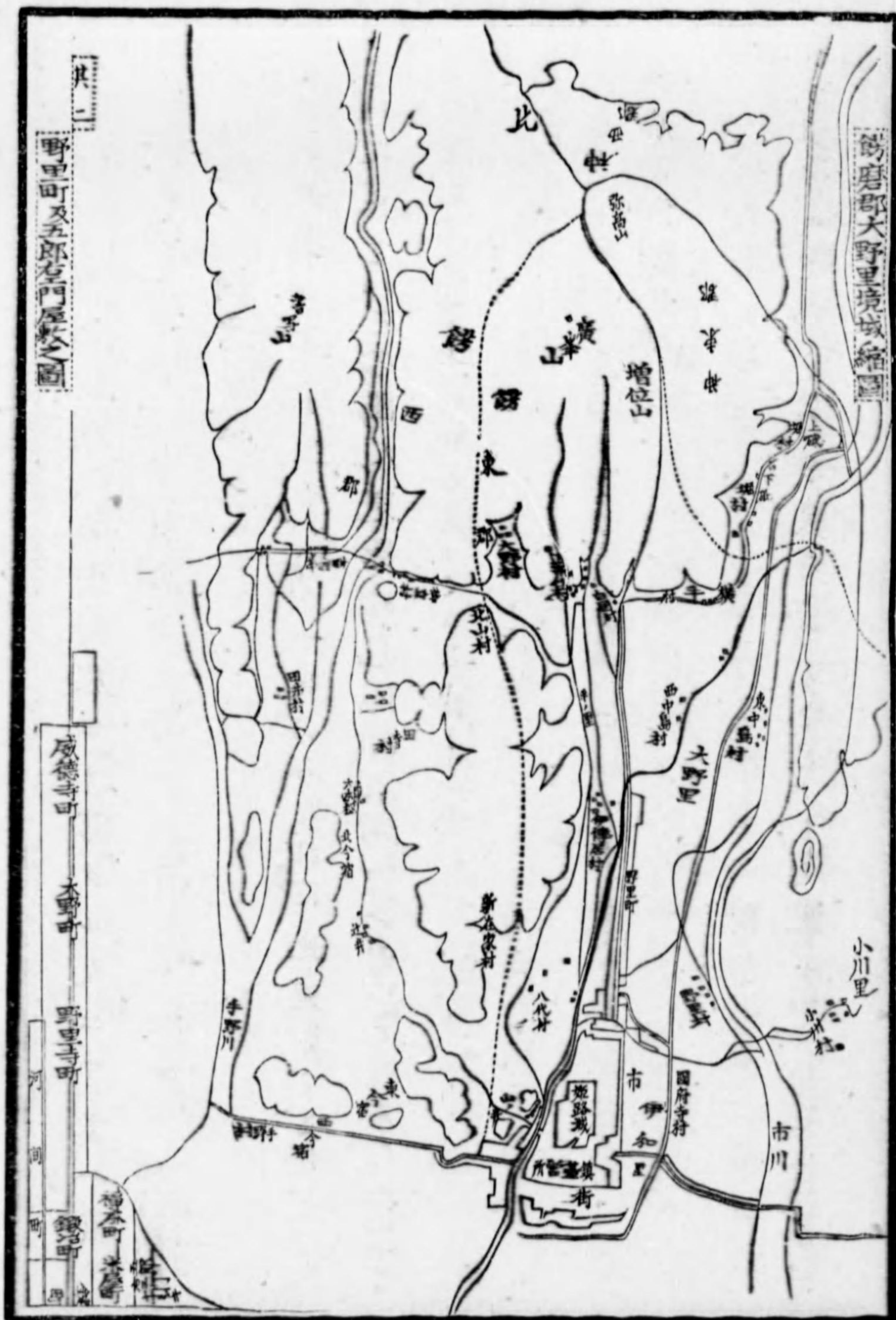
ニテ射楯兵主神社ナリ維新以前ハ軍八頭伊和里ニ係リ、五郎右

正一位總社伊和大明神ト云ヘリ衛門屋敷米屋町福本町河間町半分ハ野里氏子野里村巖坐

ニテ、今モ古代ノ區域ヲ知ラル、也、

右考ハ實地ニ就テ考タルニテ書ノ微スベキナシ、僅ニ小  
 川里條ナル一句ト砥堀ノ地續キナルヲ證トシタルナ

レバ、實地不案内ニテハ諾ナヒ難カラント思ハル、依テ現  
 今ノ地圖ヲ添ヘ考ノ妄ナラザルヲ證セン、今大野ト云村  
 ハ古代ノ大野里ニ非サルコトハ上ニ辨シタルガ如シ、但シ  
 今ノ大野ト云村名ノ由テ來ル所今詳ニ知リ難シ、強テ按  
 フニ彌高峰飾東郡ト播磨歌枕ニアリ、廣峰古城大野庄ト播磨  
 名所巡覽圖繪ニ在ハ、彌高山仙源寺城址凡廣山古城址凡云  
 テ砥堀山ノ内ナレバ、大野庄トアルゾ正シカリケル、増位山  
 ヨリ北一里トアリテ廣峯ノ山續キ也、一説ニ此城没落ノ時  
 赤松氏ノ時代ニ係ルト云城將松ノ尾竹ノ房一ハ廣峰山ニ落テ僧ト成  
 リ竹ノ房ト云、房ハ廣峰山ニ現在ス一ハ平野山ノ麓ニ落居シタリ、然  
 レモ猶敵ノ暴害ヲ被ル故ニ今ノ大野村ニ移リ住タル由、



野里町及五郎門屋敷圖

飾東郡大野里境域縮圖

土人ノ言傳 此松尾氏元大野庄ヨリ落タル人ニテ、其一黨此地ニ住着タルヨリ村名ヲ大野トハ云シナランカ、此村松尾異姓ハ三猶考フベシ、  
戸也ト云

おのれ姫路まやどりたるはたゞ一夜のみなれば、地理のことなどハ志られねど、こゝその國人兒島ぬしの深と考へてものしたるなれば、さることならんとおぼゆるまゝこゝは出づ。

播磨の濱づと終

此濱づとハ、こたび我見きつるこゝも、家まかへりてうからど

もよ志めさむ料まものしたるまで、かゝ名づけつるハ、萬葉集に  
歌よ

汐干なは玉藻かりつめ家比妹か濱つと乞ハ何を志めさむ  
ごあるをおもひてなり、

木村正辭志るす

明治二十二年九月十九日印刷  
明治二十二年九月二十日出版

著者

東京府平民

木村正辭

東京下谷區坂本村  
三十二番地

兵庫縣士族

魚住長胤

東京日本橋區本石町  
一丁目一番地寄留

發行所

大八洲學會

東京日本橋區本石町  
一丁目一番地

賣捌所

神田區南神保町二番地  
博弘堂

### 大八洲學會發行六國史校正趣旨

我國ノ萬國ニ冠絶スル者。實ニ皇統一系萬世不易ノ典是也。皇統一系萬世不易ノ典ハ何ヲ以テカ之ヲ知ル。正史有テ存スルガ故也。抑治亂政刑人情風俗時世ノ沿革事物ノ起原。凡白駁ノ事史ニ據サレバ之ヲ知ル事能ハズ。故ニ國トシテ史ノ存セザル無ク。國トシテ史ヲ貴バザルハ無キ也。而シテ本朝ノ正史所謂六國史アリト雖。今世行ハル者イヅレモ坊間刻本ニシテ。脱落誤謬甚多ク。間亦錯簡アリテ。殆句スベカラザルモノアリ。誠ニ慨歎ニ堪ヘズ。且夫今ヤ西洋各國ノ學士ニシテ。我國ノ歴史ヲ講究スルモノ鮮シトセズ。而シテ如此謬本ニ就テ之ヲ講究シ。以テ本國ニ傳フ。是誤以テ誤ヲ傳フ者ニシ。我國體ニ關スルコト少小ナラザルナリ。依テ今般吾輩協力同心シ以テ六國史ノ古本ニ就テ。刻本ノ誤謬錯簡ヲ訂正シ。之ヲ印刷シテ世ノ同好ニ頒チ。聊國家ノ爲ニ盡ス所アラントス。冀クハ愛國盡忠ノ士。此舉ヲ贊成補助アラントラ

#### 訂正ノ大意

- 一 校正ハ成ベク舊觀ヲ失セザルヤウ注意シ。文字モ古書ニハ古字アリ。借音ノ字アリ。又同字ニシテ異體ナルモノ。及六朝以來ノ俗字ナルモノアリ。是等ノ類ハ其古色ヲ存センガ爲ニ舊本ニ從ヒ敢テ妄改セズ。
- 一 日本書紀ノ如キ。今本ノ旁訓ニハ疑ハシキモノモ多クアレド。證憑無キモノハ猶疑フ存テ改メズ。
- 一 校正ニ引用スル古本ハ。皆其傳來ノ確ナルモノ、ミテ採テ。傳來ノ知レザルモノハズベテ採用セズ。
- 一 古本ハスベテ其所藏者ノ氏名ヲ舉グ。又古人ノ校正ニ引用シタルモノ、。今其原本ノ得ガタキハ。其校合シタル人ノ名ヲ出シテ某氏引ニ某本ト云テ其原ヲ明カニス。
- 一 文字異同アリテ兩可ニ涉ルモノハ。一ニ原本ニ從ヒ。其異ヲ校異中ニ載ス。
- 一 古本ニ據テ文字ヲ改タル者ハ。其改タル由ヲ記シ。以テ舊本ノ文字ヲ校異中ニ存ス。
- 一 誤字又ハ衍字ナリト認タルモノ。諸本同ジキモノハ。誤字又ハ衍文ヲモトノ今按テ校異中ニ記シ。本文ニハ猶原字ヲ存シ。雙字ト雖。敢テ意改セズ。

#### 六國史購求豫約規則

●第一條  
本會發行スル所ノ六國史ノ購求豫約者タルモノハ左ノ條件ニ依ルモノトス

六國史全部ノ購求金ハ通常部金四圓別項甲ノ部金六圓全乙ノ部金八圓五拾錢トス  
 購求者全部豫約金ヲ本會ニ前納スルモノトス  
 購求者全部豫約金ヲ二回又ハ三回ニ送金スルモ妨ケナシ  
 但前納送金ノ購求者ハ本會ニ於テ運賃仕辨シテ送本ス二回又ハ三回ニ送金スル購求者ハ通運賃先拂ニシテ本會之ヲ發送ス

●第二條 體裁  
 舊板六百三十九枚 新板六百三十九頁 製本二冊  
 但シ舊板ノ表面ハ新板ノ壹頁中上半分トシ舊板ノ裏面ハ新板ノ全下半分トス  
 新舊其様不改シテ索引ノ辨ヲ計ル以下同シ

日 本 紀  
 舊板八百九十六枚 新板八百九十六頁 製本二冊

日 本 後 紀  
 舊板二百八十七枚 新板二百八十七頁 製本壹冊

日 本 後 紀  
 舊板四百八十七枚 新板四百八十七頁 製本壹冊

文 德 實 錄  
 舊板二百十六枚 新板二百十六頁 製本壹冊

三 代 實 錄  
 舊板千六十一枚 新板千六十一頁 製本三冊

六 國 史 校 異  
 凡二百五十枚 新板二百五十頁 製本ハ每卷ノ末ニ附ス

合 計 舊板三千八百四十二枚 新板三千八百四十二頁 製本拾冊

●第三條 印刷一千部費用計算  
 ○印刷一千部費用計算  
 金七百六十八圓四拾錢 原本買入并筆耕料  
 金八百五十九圓五十五錢 壹頁金貳十五錢  
 金參百八十四圓貳十錢 壹頁金拾錢  
 金五百七十六圓參十錢 壹頁金壹毛五朱  
 金八百六十四圓四拾錢 壹頁四毛五朱  
 但シ假綴合計一万冊 壹冊ニ付金參錢  
 消 耗 金參千七百五拾貳圓九拾錢 郵便送本廣告等ノ諸費

總計 四千圓 全部ノ平均 壹部ニ付六拾七錢也 壹冊ニ付四拾錢也

別項 甲 同印刷體裁ニシテ本綴仕立ノ分ハ金貳圓ヲ増ス合金六圓也  
 乙 又用紙ヲ半紙ニシテ製本貳拾六冊仕立ノ分ハ金四圓五拾錢ヲ増ス  
 合金八圓五拾錢也 但購求者ノ望ニ應シ本會之ヲ調製送本ス

●第四條 役員  
 本件ノ結了ニ至ル迄ハ左ノ通ニシテ事ヲ擔任ス

一 原 本 訂 正 專 任 木 村 正 辭  
 二 訂 正 補 助 飯 田 武 鄉  
 三 小 杉 榎 郵

●第五條 會議  
 本件ニ付毎月二回會議シ第一第三日曜午後一時ヨリ本會事務所ニ於テ訂正及事務ノ評議ス  
 本件ハ本月ヨリ着手シ向フ二ヶ年間ニ成功スルノ豫定也

●第六條 購求者注意  
 一 購求者注意  
 二 購求者注意  
 三 購求者注意  
 四 購求者注意  
 五 購求者注意

一 購求者注意  
 二 購求者注意  
 三 購求者注意  
 四 購求者注意  
 五 購求者注意

一 購求者注意  
 二 購求者注意  
 三 購求者注意  
 四 購求者注意  
 五 購求者注意

一 購求者注意  
 二 購求者注意  
 三 購求者注意  
 四 購求者注意  
 五 購求者注意

一 購求者注意  
 二 購求者注意  
 三 購求者注意  
 四 購求者注意  
 五 購求者注意

一 購求者注意  
 二 購求者注意  
 三 購求者注意  
 四 購求者注意  
 五 購求者注意

一 購求者注意  
 二 購求者注意  
 三 購求者注意  
 四 購求者注意  
 五 購求者注意

日本橋區本石町一丁目一番地 大八洲學會假事務所

●六國史豫約申込書式 (但半紙、堅半分)

大八洲學會發行六國史豫約申込書  
 豫約(通常、部又ハ(別項、甲部)(別項、乙部))  
 一 六國史 全部 壹通リ  
 右豫約金四圓(別項甲部金六圓)(別項乙部金八圓五拾錢)今般送  
 金致候間受領証御送付可被下候也  
 追テ該書印刷製本出來、上ハ早々御送本可被下候事  
 何國何郡何村 誰 印  
 明治廿二年 月 日

大八洲學會發行書目廣告

●本會發行書籍ハ本會員外ハ定價通トス  
 久米幹文著 栗田寛序

○大八洲史 全部五編  
 太古篇 上中篇 古古篇  
 近古篇 近世篇

此史は久米幹文大人の假名交り、太古より近世に至る迄を編年体ニ筆記せられたるものなり。まづ太古は天地剖判より起りて、鵜草葺不合尊より起り、上古は神武天皇より皇極天皇より起り、中古は孝德天皇より安徳天皇より起り、近古は後鳥羽天皇より後陽成天皇より起り、近世は後水尾天皇より孝明天皇より起り、此年數三千年間の事柄を各徴証して、其事實を平易ニ書きあかされたれり。即ち本邦三千年間の事柄は、女童子といへども尤も心得らるべき寶典なり。

●大八洲史 初編 定價金四拾錢 郵送料金拾六錢 通運賃全國平均金八錢  
 本史は太古の天地剖判より上古の神武天皇の御代を経て中古の應神天皇の御代に至る本文二百六十三頁 製本假仕立

●大八洲史 次篇 定價金四拾錢 郵送料金拾六錢 通運賃全國平均金八錢  
 本史ハ中古の仁徳天皇の御代より起り、おなじく孝極天皇の御代に至る記事なり

●大八洲史 三篇 定價金四拾錢 郵送料金拾六錢 通運賃全國平均金八錢  
 本史は孝德天皇の御代より起り、おなじく聖武天皇の御代に至る九代間の記事なり

●大八洲史 四篇 近刻

本居豊穎撰集 三條實美公題字 毛利元徳公序

○大八洲歌集 全壹册

本集は大八洲學會會員の出詠を撰拔し、并ニ明治聖代ニ遭遇せられし此道の有名なる大人等の歌を撰集せられたるものなり。其歌數は二千七百首餘、其人員は七百六十名餘なり。其部分は新年、春夏、秋冬の五部を上巻とし、戀旅、詠史、雜上、雜下、雜体、旋頭歌、今様の八部を下巻とし、附録ニ歌人の宿所姓名を記す。本會其本集卷の一を今明治二十一年の九月ニ發行す。次卷は時々撰集して刊行するものとす。

●大八洲歌集 假綴 定價金五拾錢 郵税金三拾二錢  
 右本綴の分は特別の申込ありて、調製せしが尙ほ餘分有之。付御望の方は、實價金壹圓五拾錢と郵税或ハ通運賃を添て御送金あれば送本す。

○古今和歌集講義 全部五編

本集の眼目は初學の心得や、もからんか爲よ本居大人の精駁を撰みて、説きあかされたるを田所先生き、かきまづるなり。凡そ此歌集の註釋は何くれとなくあまたあり、雖も此筆記の簡便にして、能く其要領をつくされたる如く、ものなはし去れば、詠歌者流は平生かならず座右をばなさず讀み味ひひて、所詠の龜鑑となすべき珍書なり。

●古今和歌集講義 初篇 定價金四拾五錢 郵送料金拾六錢 通運賃全國平均金八錢  
 本書は本集の序の部と、春歌の部、夏歌の部の全を合巻として、本文三百五十頁

●次卷 近刻  
 田所千秋著 本居豊穎撰 久米幹文序  
 ○小倉の山口 全壹册 定價金廿五錢 郵税金拾錢 通運賃金四錢

本書は小倉百人一首を田所先生解釋せられたるものなり本書の注釋も何くれと多きも其和歌の深意を平易な女童子も知りえらるゝものは此の山口なるべし

千家尊福講説 高橋光男筆記

○風教百首講説 全一冊 定價金貳拾五錢 郵税金拾錢 通運賃全國平均金五錢

本書は上中下の三篇を合巻して百五十頁なり 製本同上  
本書は千家尊福大人同千家尊澄大人の道の教を和歌にて示されたる所の歌詠よつきて尊福大人の講説せられたるを高橋先生筆記せられたるものなり ●凡そ本邦の皇道示教の端緒を開かんと欲せば本書を繕ふ在りと云はざるを得ざる良書なり

高平真藤著 久米幹文 前田夏繁 澤田穂國校訂

○音訓假字便覽 全一冊

定價金拾五錢 郵送税金八錢 通運賃全金四錢 本書八百三十頁 製本同上  
音訓及び假字用格等の書屈指すべからざる多きありと雖も各長短ありて漸く其堂よ升るも其室よ入る事堅く迷津の歎を發する者尠ならず高平先生深く之を慨き多年刻苦して著されたる所なり然れば此書を繕く時は字音假字用格より五十音訓清濁活語等口授を俟ずして一目の下よ了解せらるゝ簡易なるものよて雅俗を論せず片時も座右を放つべからざる金玉の良書なり

栗田寛 編述 小中村清矩序 内藤恥叟序

○莊園考 全一冊

定價金五拾錢 郵送税金拾八錢 通運賃全金八錢 本書は二百六十頁余製本同上  
本書は本邦古昔の莊園に於て其所領 所在 名稱及び其沿革等詳細に古書に徴し考證せられたるものなり然れば本邦古昔制度の沿革を知らんと欲するものは必ず此書を繕けは其詳細を心得らるゝべき古今未曾有の寶書なり

水村正辭著

○櫛齋雜攷 全二冊

木板 定價金五拾錢 ●會員購求金四拾錢 郵税金拾八錢 通運賃金八錢  
此書は先生古事記日本書紀に用いたる皇國製造の文字またの異體の文字等の古人の未

考へ及ばざるとを倭漢の書に徴して辨明したるものよして鮮明なる木板にて和製の冊子なり其攷中よは久しく世に疑はれたりし伊弉册尊の冊字のと古事記の討賣比賣の討賣字また驚愕の字等の事を明しまた古事記傳よ偏を省けるなりといひし文字はいづれも古字なりと通用假借の字なることよて偏を省けるよはあらざるよしを一々證を舉て辨へられたるゝと皇國の古書を見む人ハ必し讀むべき書あり

水村正辭著

○萬葉集書目 全壹冊 木板 定價十二錢 郵税六錢 通運四錢

此書は萬葉集に關れるすへての本ともの書目のみを記したるものなり

水村正辭著

○萬葉集書目提要 全上下二冊

定價金五拾錢 郵送税金貳拾錢 通運賃全金八錢 總頁數三百頁余  
此書は萬葉集に關れるすべの本ともの提要を詳よするものよして版本はさらなり諸の古本また本書の注釋の書類を部を分ちて各其提要をあるしまた仙覺律師の校合したる本ともの事其他古點次點新點の事及び撰者等の事をも論辨したるものよして萬葉集を見む人の爲よは緊要の書なり

水村正辭著

○萬葉集美夫君志 全廿冊 定價壹冊金三拾錢 郵税拾六錢 通運賃金八錢 製本假仕立

此書は曾て萬葉集を注釋して證注と名づけて六十卷ばかりあるが其中より證注鈔本(一名萬葉集みぶぐし)と題して追次刊行するもの也

飯田武郷著

○神代系圖 全壹帖 定價金五錢

飯田武郷著

○日本書紀通釋 通編貳拾冊 壹冊金三十貳錢 上中下此三部よ區分して遞次刊行す

本書は飯田武郷大人多年辛苦を積み校定せられたる所の筆記よして先哲の解釋は遺漏なく其の所説を擧げ且自説を添へて其欠を補ひ懇切の著作なれば本書の精解は此通釋と云



ふへき良書なり 本書を上中下の三部に區別して上編の一神代卷と中編の一神武天皇の卷を刊行す次下三部毎一冊つ、印刷して三冊を一帙として出すなり ●上篇之一 神代 定價金三拾貳錢 ●中篇之一 神武天皇紀 定價金二十貳錢

渡邊重石丸著

○固本策 全五篇製本二冊

古語拾遺古事記神代紀祝詞式萬葉集の五部を經典と看做し所謂邦家之經緯王化之鴻基と云義を擴張し漢文を以て治國施政の本を論したる書也○末に讀論語の設三篇を附録とせり我か神皇の寶典皇祖の大訓先王の法言よ非るよりは日本魂の鐵腸を鍊りて以て吾が國家固有の元氣を回復するよ足らず論語の輸入は吾國の臣民外慕の念を引起したる嘴矢よして神州毒物の魁たりといふべく實よ愛國者の目を覺ますよ足る痛快の論あり

渡邊重石丸著 久保季茲序

○學海針路 全一冊 定價金二十錢 郵送稅六錢 通運賃全國平均全金四錢

右は國體維持の學術を論じたる書なり苟も吾帝國の人民よして愛國の有志者必ず一讀あるべき書なり

久保季茲著

○古語拾遺講義 全壹冊 定價金廿五錢 會員購求金廿錢 郵稅拾四錢 通運賃八錢

本書は久保大人在世中講義せられたるを筆記したるものなり已よ世よ公よなりて今般本會の刊行は其二回目なり

小杉楳郵著

○副注 榮花物語 全貳拾冊 壹冊金拾五錢 郵稅金八錢 通運賃金四錢

本書ハ小杉大入の多年座右よ翫ひて研究せられし其校本を刊行するものなり然して附録よ年立及ひ餘釋語釋ありて其事實と訂されたれば華族女學校并高等女學校等の教科書なるも當時定本なきを以て旁々遞次刊行す ●初篇ハ本書の一二よして刊行濟

右本會發行の書籍中割引を爲さるものは特よ會員購求額を記載せり

明治二十二年二月

日本橋區本石町一丁目一番地

大 八 洲 學 會



291.64

Ki192㊦

播磨の浜づと

国立国会図書館

025594-000-9

291.64-Ki192㊦

播磨の浜づと

木村 正辞/著

M22

ADC-3088

